

偶像不羈なる書生

奨励	桜井 希 [さくらい・のぞみ]
奨励者紹介	同志社中学校・高等学校聖書科教諭

どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるよう。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

(エフェソの信徒への手紙 3章16-19節)

偶像不羈とは

京都の岩倉にあります同志社中学校・高等学校で「聖書」という教科を担当しております、桜井と申します。同志社に勤めて20年目になりますが、その間、主に中学生と共に創業者・新島襄の生涯を学び、また聖書を読むということをして参りました。本日はDoshisha Spirit Weekということですので、新島襄とある中学生との出会いについてお話してみたいと思います。

新島襄の遺言の中にこんな一節があります。「同志社二於て八偶像不羈なる書生ヲ庄束せす務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可きし以て天下の人物ヲ養成す可き事」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』4 同朋舎出版 1989年）。今日のメッセージのタイトルにもさせていただいたこの「偶像不羈（てきとうふき）」という言葉は、同志社では幾度となく聞くフレーズです。「偶像」は能力が高いこと、才能に優れていることを意味し、不羈の「羈」は馬につける「たづな」のことですから、「不羈」は束縛されないことを意味します。つまり「偶像不羈なる書生」とは才能が並はずれていて、常識や規則に囚われず、自由に振る舞う学生を指しているわけで、新島は、そのような学生を圧迫しないでその個性を認めて伸び伸びと大きな人物に育てなさい、と言うのです。なぜそのような遺言を新島は残したのか。それは新島自身が「偶像不羈なる書生」であったからではないか、と私は想像します。

聖書との出会い

皆さんご存知のように、新島は今からおよそ150年前の幕末（1864年6月14日・新暦7月17日）、海外渡航が禁止されていた時代に、函館から密かに外国船に乗り込んでアメリカ合衆国へと渡りました。キリスト教禁制のもと聖書の類（たぐい）を読むことが禁止されていたにもかかわらず、新島は友人の家で密かに開かれていた聖書の勉強会に誘われ、これまた密かに出回っていた漢訳聖書の抜粋を借り受け、夜中に夢中で読んだことが脱国の決意を固める一因になったと言われています。

脱国を促した聖書の箇所、それは創世記に記されている天地創造の物語でした。新島はこの物語からこの世のすべてのものが神によって創られたことを知るわけですが、この時の衝撃を、彼は後に書いた「脱国の理由書」の中に次のように記しております。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神だ。神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らされたが、その机は現実にごくかの木からできたものだ。そうであるなら、私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」（同志社編『新島襄自伝』岩波書店 2013年）と。

自分の命は神から与えられたものであって、自分の命を支えてくれているありとあらゆるものもまた、神によって創られたものであった。このことに気づかされた新島は「神に感謝しなければ」という思いを抱きますが、続けて彼は「神に対して正直にならなくては」「I must be upright against him.」と言っております。ここで「正直に」と訳されている言葉（upright）には「まっすぐな」「直立して」という意味もありますが、私はこの言葉は当時の新島の心境を物語っているように思えるのです。

書生を庄束せず

つまり、それまでの新島は、心には思っていなくても藩主のご機嫌を取るためにお世辞の一つでも言わなければならなかった。何をやるにしてもどこに行くにしても上司にお伺いを立て、許しを得るために頭を下げ続けてきた。もちろん外国に行きたいという気持ちを誰にも打ち明けることができなかった。しかし、彼は神と出会うことによってようやくまっすぐに立ち、自分の思いに正直になることができた。そのような青年時代を思い起こしながら、新島は私たち教師に対して「あなた方は抑圧する側に立ってはならないのだ」との思いを込めて「偶像不羈なる書生ヲ庄束せず」という遺言を残したのではないかと思うのです。

学校というところは、得てして教師の価値観や学校の常識といったものを生徒たちに押しつけますし、教師は生徒たちを評価する側、成績をつける側に立っているために、生徒たちを自分に従わせたいという誘惑に駆られます。けれどもそうであってはならない。教師もまた生徒たちと共に、神に対して、真理に対して正直に、まっすぐに立とうとする者でありたいと思うのです。なぜなら私たちは神ではなく真理でもなく、神によって創られた被造物の一つに過ぎないからです。

生徒を鄭重に

もう一つ、新島の遺言を紹介いたします。それは「偶像不羈なる書生ヲ庄束せず」の直前に置かれた一節です。「社員たるもの八生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」（同書）。言うまでもなく、教師は学生に対して高圧的であったり、傲慢であってはなりません。ましてや暴力的に振る舞うことは許されません。

私は授業の中で、必ずこの遺言を紹介しているのですが、実はこれらの遺言は本校の生徒手帳にも記載されていて、私は半ば冗談のつもりで「もしこれからの学校生活の中で先生から丁寧に扱われなかった場合、生徒手帳の遺言のページを開けてその先生に突きつけたら、その先生は即座に態度を改めて君たちを丁寧に扱ってくれるはずだ」と言ったことがあります。もちろん時と場合によっては、この遺言を出すことで、逆に状況が悪化することもあり得るということも言うわけですが、これを真に受けて本当に私の言ったことを実行した生徒がいました。

今から十数年前のことです。その生徒は生き物が大好きな少年でして、本校のサイエンス部というクラブに所属しておりました。ある日彼は自宅付近の池から生きた亀（もしかしたら魚だったかもしれませんが）を学校に持ってきて、朝一番に生物教室の水槽に移したのだそうです。授業が終わるクラブ活動の時間になると、彼は早速生物教室に行ってその生き物を観察しておりましたが、そうなる今度はそれを顧問の先生に見てもらいたくなる。そこで彼はその先生がおられる教員室まで飛んで行き、ドアをノックして「〇〇先生、早く生物教室来て一な」。その先生はその時大変忙しかったようで「ちょっと、待っていな」と言ったそうですが、彼は引き下がらず「そんなん言わんと頼むわ」、「今なあ忙しいねん、もうちょっとやから」。

こんなやり取りがあった後、彼はおもむろに何かを取り出して「〇〇先生、これが見えぬかー」と突き出して見せたのです。その先生はしばらくそれが何なのか分からずに、「何してんねん」と言いながら彼に近づき、突きつけられたものに目を凝らしてみると、それは「社員たるもの八生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」という遺言を黄色のマーカーでなぞってある生徒手帳でした。その先生は「分かった。すぐ行こ」と言ってすぐ自分の仕事をおいて、その生徒と一緒にダッシュで生物教室に向かったと言うのです。その先生は、生物教室から帰って真っ先に私のところに来て「桜井さん、やられたわ」と言って事の次第を嬉しそうに語ってくれたのです。

しかしこの生徒は、残念なことにその数年後の秋、交通事故で亡くなりました。同志社大学文学部の2回生の時でした。今出川キャンパスでの大学EVE祭の準備が終わってバイクで帰る途中、自宅まであと数分というところでの衝突事故だったそうです。私たちにとっても、とりわけご両親にとっても全く予期しなかった、受け入れがたい一人息子の死でありました。葬儀にはたくさんの方々が駆けつけましたが、彼の遺影は、肌寒い秋にしては季節はずれの鮮やかなアロハシャツを着た写真であったことを、私は昨日のこのように思い出します。

被造物として生きる

聖書によりますと、私たちは等しく神によって創られた者です。塵から取られ、そして塵に戻る存在であります。すべての者の命には限りがあって、そこには痛みがあり、悲しみがあります。だからこそ限られた時間と空間の中で、私たちは互いの命を、今生きて共にあることを大切にしたいと思うのです。そして、どれほど生きるに困難な時代であっても、私たちは神に対して、真理に対して正直に、まっすぐに立ち、希望をもって生きていきたいと思います。